第2回 京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会

《日時》

平成30年11月5日（木）17:00～19:00

《場所》

下京区役所 4階 第1会議室

《委員》

氏名	所属等	備考
赤星 周平	(公財) 京都文化交流コンベンションビューロー 国際観光コンベンション部長 (公社) 京都市観光協会事務局次長兼国際誘客推進部長	
植田 義雄	京都美術工芸大学事務局長	
長上 深雪	龍谷大学社会学部教授	欠席
鎌田 高雄	稚松連合会会長	
佐藤 知久	京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授	
高岡 千浪	京都美術工芸大学工芸学部3回生	
谷中 知世	市民公募委員	欠席
丹治 潔	七条商店街振興組合理事長	
寺川 政司	近畿大学建築学部建築学科准教授	
菱田 不二三	崇仁自治連合会会長	
松永 洋子	京都市民生児童委員連盟会長・貞教学区民生児童委員協議会会長	
門内 輝行	大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授	委員長

(五十音順, 敬称略)

《配布資料》

- 資料 1 京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会 委員名簿
資料 2 京都駅東部エリアのポテンシャルと課題, まちづくりの方向性について
資料 3 京都駅東部エリア活性化将来構想(仮称)(案)
資料 4 今後のスケジュール
参考資料 崇仁地区住宅地区改良事業の位置図

《議事録》

1 開会

◆事務局

ただいまから, 第2回京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会を開催いたします。

各委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

まず始めに、新しく委員に御就任いただき、この第2回検討委員会から御出席いただくことになっております委員がおられます。崇仁自治連合会会長の菱田不二三様ですが、15分ほど遅れてご到着されます。

本日の委員会につきましては、計12名の委員のうち、委員の過半数の方に御出席いただいておりますので、当委員会規則第3条第3項の規定により、委員会が成立していることを御報告させていただきます。

なお、長上委員、谷中委員につきましては、御都合が悪く、やむなく御欠席されておりますので、御報告させていただきます。

また、当委員会は公開であり、報道関係者及び市民の皆様の傍聴席を設けておりますので、御了承いただきますようお願いいたします。

それでは、委員会の開催に当たりまして、山本亘総合企画局プロジェクト・情報化担当局長から一言、御挨拶を申し上げます。

◆山本総合企画局プロジェクト・情報化担当局長

門内委員長はじめ、委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

先ほど、事務局からも紹介ございましたように、今回から崇仁学区の菱田自治連合会長にも委員として、御出席いただくことになりました。議論が、より深まることとなるものと考えております。

第1回の検討委員会では、改めて、京都駅東部エリアのポテンシャルが高いことや、京都芸大の移転を契機に、まちづくりに対する市民の皆さま方の期待が大変、大きい場所であるということを確認しました。

前回の委員会で、門内委員長から「まちというのは人である」というお言葉がありました。そこに人が住み、人が集まり、交流が起こる。人なくしてまちの活性化することはないということでした。

それは、どんな場所であっても同じだと思います。人を大切にするまちづくりをし、そこに、このエリアならではの彩りを加えていく必要があると考えています。

こう考えると京都芸大の移転は大変大きなインパクトがあり、このエリアの活性化の大きな起爆剤になると考えております。文化芸術を基軸に、そこに暮らす皆さま方や、訪れる方々の視点を大切にしながら、個性豊かなまちづくりにつながる将来構想にしていきたいと考えています。

さらに、この東部エリアと周辺エリアとの調和、連携といった観点も重要と考えています。これも前回、御意見をいただきましたが、京都駅東部エリアという点だけで考えるのではなく、周辺のエリアも含め、面としてのつながり、広がりを持つよう、エリアの立地特性を生かした将来構想としていきたいと考えています。

まちづくりは、様々な分野や観点に及ぶものです。委員の皆様方からの御意見、そして活発

な御議論，御審議をお願いします。

◆事務局

それでは，ここからの議事進行につきましては門内委員長にお願いしたいと存じます。門内委員長，よろしくお願いいたします。

◆門内委員長

それでは以降の進行を務めさせていただきます。御協力のほど，よろしくお願い申し上げます。

2 議題

- (1) 京都駅東部エリアのポテンシャルと課題，まちづくりの方向性について
- (2) 京都駅東部エリア活性化将来構想（仮称）（案）

◆門内委員長

前回，京都駅東部エリアの現況とポテンシャル，課題，まちづくりの方向性について議論し，今後のスケジュールも確認しました。

全体のスケジュールとしましては，第3回が12月の中下旬頃に予定されておりますが，そこで将来構想の素案を検討することになりますので，今日は基本的に色々な論点に漏れないかどうか，漏れがあると，素案の中から落ちてしまうという可能性もありますので，しっかり議論ができればと思っております。

12月の段階で将来構想の素案を検討した上で，1月にはパブリックコメントを実施することとなりますので，どうぞよろしくお願い致します。

それでは，議題の（1）「京都駅東部エリアのポテンシャルと課題，まちづくりの方向性について」，（2）「京都駅東部エリア活性化将来構想（仮称）（案）」について，まとめて事務局から説明を行っていただき，その後，委員の皆様から，御意見をいただきます。

それでは，事務局から資料の説明をお願いいたします。

【資料2，3及び参考資料につき，事務局から資料説明】－省略－

説明後，遅れて到着された菱田委員を紹介。

◆門内委員長

では本日は，次の観点から御意見をいただきたいと考えています。まず，1番目は資料3で「将来ビジョン」「目指すべき将来像」「目指すべき将来像を実現するための方策」がまとめられていますので，抜けている観点がいないか。資料2を踏まえて資料3が作られており，この資料3をベースに構想素案が今後作られます。

2番目に，「目指すべき将来像を実現するための方策」が3つが挙げられ，それぞれについて，具体的にキーワードが並んでいます。これらのキーワードの中から，こういった推進項

目が考えられるのかアイデアをいただければと思います。あるいは、推進項目の策定に参考になるような、現在取り組まれている活動等がありましたら、それについても、御紹介ください。

3番目に、前回の委員会でも意見があがっておりました、崇仁地区の土地の利活用についてです。これは参考資料を御参照ください。特に市が所有している土地等の有効利用について御意見をいただければと思います。

ビジョンというのは大事で、例えば昔住んでいた場所が、10年経って行ってみたら大きく変わっているということがあります。毎日毎日、変わっていないようだけれども、10年ぐらい経ち、気が付くと、小さな変化が大きな変化に変わっています。そのときに小さな変化が、どこへ向かっているのかということが大事で、その向かっている行き先がビジョンだと思います。皆が自分のこととして、ビジョンに向かって努力を重ね、それらが重なり合って、相乗効果が生まれ、10年後に気が付いてみたら、「最近、あのエリアはすごくよくなった」と言われるものとなるように、このエリアが10年後にどうなるのか、あるいはどうなっていてほしいのかといった夢をビジョンにすることが大事です。そのビジョンの実現に向けて、何を優先的にやっていったらよいのかを考えることとなります。

このエリアには今度、京都芸大が移転してきますし、すでに京都美術工芸大学があり、文化芸術が他のエリアに比べるとコアになりそうだということで、「文化を基軸としたまちづくり」という大きなテーマが掲げられています。

それから、今までの20世紀型の産業ですと工業が中心でしたが、21世紀型は知識産業へとシフトしてきています。知識産業というのは、文化が起点になる、文化芸術に駆動された産業なのですが、新しい経済を駆動する一番のエンジンに、今まで産業とは関係がないと思われていた文化芸術がなることも考えられます。これから文化庁が京都に移転してきますし、京都が文化を創造していく起点になっていくと思います。それを牽引していく役割を担うべきエリアだと位置付けていければと思います。

◆菱田委員

崇仁地区の土地の利活用についてですが、あそこはフェンスに囲まれたただの空き地ではないです。フェンスで囲まれた場所の活用について議論しても、あの土地は国の補助金を入れて、京都市が改良住宅、市営住宅の建設用地として取得した土地なので、この問題をクリアせずして、勝手に活用することは不可能です。

同和問題は終結宣言がされましたが、崇仁地区はまだ終結しておらず、残事業があります。それが完了しない限り、例えば、市営住宅の空き家に若い人に入ってもらいたいと言っても、できないのです。出て行った若い人が、自分の親が弱ったからと帰ってきても、その親が亡くなってしまえば、一定期間以上一緒に住んでいない限りは市営住宅の継承もできません。同和問題は終結したと言いながら、崇仁の場合は終結していないという矛盾があり、65歳以上が5割を超えるようなまちになっています。ですから、地元の間人は、若い人を呼び込んで、住み続けられる、本当のまちのかたちにしてほしい、空き地については、早く方針を決めてほしいと言っています。そのためには、京都市が国に対して、かつて市営住宅のために購入し、国

から補助金をいただいたけれども、補助金を返す金は京都市にはないため、補助金を返さずに、他の形で使わせてほしいと、折衝しないといけない。こうした実情を抜きにして、今ここで話をしても、崇仁の空き地と言われているところは使えません。

先日の京都市会の本会議では、ある党の先生が言うに事欠いて、地元は京都市の言うがままに動いて京都芸大を誘致したとして、崇仁自治連合会のことを御用自治連合会とおっしゃいました。私どもは下京涉成小学校区の5学区で、エリアマネジメントの取組を進めています。5学区一緒になって、この先生の発言に対し抗議することとしています。この御用自治連合会ということばが指しているのは、5学区ですが、京都芸大の移転には下京区の全23学区の会長が連名で要望書を出しています。

先生いわく、京都芸大が来る場所のような一等地を1、500人足らずの学生に使わせるより、大阪の梅田北ヤードのような商業地域を持ってきた方が役に立つとの考えです。

あのフェンスに囲まれた空き地と言われている場所は、決して空き地ではないということ、この委員の先生方にも知っておいていただきたいと思います。

◆門内委員長

国の制度との問題については私も承知しています。国に要望するためにも、どうしていきたいという方針を持って行かないと、ただ言うだけでは解除してくれないので、地域もみんな一緒になってビジョンを持つ必要があるかと思えます。

一方で、現状を抜きに、絵空事ばかり描いても突破できないということを、今、御指摘いただきました。大変、大事なことです。このことを心に留めた上で議論していきましょう。

◆寺川委員

今、菱田会長からお話がありましたが、まさに今、その議論が崇仁エリアマネジメントでされているところです。

今回の東部エリアの将来構想は非常に重要な構想だと思っていて、こういうビジョンで、こういうまちづくりをしたいので、あの場所をどのように活用していきたいというイメージを住民、地域の方々、行政も一緒に出して、それを、国にも伝えていくことが大事です。

特に、方策にも入ってきますが、崇仁エリアもやはり、高齢化が進み、住民がなかなか住まなくなっている状況にあります。それに対し、今後10年間でどうしていくかというものもあれば、今すぐ対応しないといけないものも当然出てくるわけで、時間をデザインしてバランスよく構想の中に組み込んでいく必要があると強く感じています。

特に、ハウジングの問題と未活用地をどのように活用していくのかということについては、もう一步踏み込んだ提案なり方向性を出していく仕組みをつくらないと、どうしても置いてきぼりになります。ゾーニングを進めるとか、提案を出していくためのマネジメントの組織を作るとか、今後動くためのメッセージとその具体化が必要であると感じています。

◆門内委員長

大きな1枚の絵を描いて、それを示して動かすのではなく、時間のデザインをして、で

きることを積み重ねていくことが次を開いていくことということですね。一方で大きな絵を描きながらも、今できることをどういう風にやっていくかが大事です。国の鍵を開けるのも、例えば、このエリアに京都芸大を移転させて、作っていますとか、崇仁エリアマネジメントで、これだけの活動をして頑張っていますとか、そういうことが鍵になっていきます。だから、一般的には「制度上、無理です。」で終わるのだけれど、時代も変わり、小さな努力を積み重ねていくときに大きな目標をどうするか、ビジョンを描き、それに対して何をすれば、実現していくか、まさに時間のデザイン、戦略がすごく大事になります。そう考えると、京都芸大の移転は大変大きな説得力を持つものの一つになります。

それから、各用地を、例えば、部分的にでも開放し、利用しながらやっていくことも実績になります。みんなが集まり、色々な活動をすることで、人と人のつながりを生まれ、地域を変える力になる。そういうことが見えていくと、一つのエビデンスになっていきます。

◆鎌田委員

今、菱田委員が崇仁地区のフェンスの問題をお話されましたが、それは皆さん理解されていると思います。市と地元と京都芸大と三者一体となって、フェンスの問題を解決する必要があると思います。せっかく一生懸命にみんながやっているのに、市会の方で意見が出ますが、抗議すべき面は抗議するとして、それをあまり気にする必要はないと思います。せっかく京都芸大が来ますから、それを起点に、文化の交流をしようということですので、そこを大事にしていけばよいと思います。

◆門内委員長

事務局で現在整理をしていただいているビジョンとしては、方策1がコミュニティ、2が賑わい、3が人づくり、環境整備となっています。

推進項目を考えるに当たって、キーワードが上がっていますので、この中で特にこの辺りを進めてほしいとか、これが抜けているとか、並んでいる中でも、相互に関連しているものもあると思いますので、その辺りもご意見をお願いします。

◆佐藤委員

京都芸大移転は非常に大きなことですが、移転時期が構想の実施期間のちょうど真ん中辺りなので、その前と後で、やることや考えるべきことが変わるのではないかと思います。京都芸大が来る前に全てを準備する必要は、あまりないのかなと私は思っています。学生が来て、10年、20年ぐらいかけて、まちは成熟していくと思いますし、京都芸大に来る学生が、卒業後にその近辺に残り、制作を続けていくときに、自分たちで、その大学を活かして、あるいは、この地域を活かして活動していくための色々な空間や仕組みを作っていくと思います。そう考えると、あまり決め打ち的に制度を作ってしまうよりは、学生が入っていく余地をいっぱい残した地域であるというのではないかと漠然としたイメージを持っています。

京都美術工芸大学も含めた学生の意見とかも取り入れなければいけないですし、京都芸大はまだ杣掛にあるので、あまり、崇仁に移転してからのことを言ってもイメージが湧かない

かもしれませんが、在学学生はもちろん卒業して間もない人たちの意見も、このエリアのまちづくりに取り込めるような仕組みがあるとよいと思っています。

私は文化人類学が専門なのですが、「文化芸術 (Arts and Culture)」とか「文化を基軸としたまちづくり」といったときの「文化」という言葉が、ずっと気になっていて、「文化を基軸とする」とは、どういうことなのかあまりクリアではない気がします。

もともと文化は別に芸術家だけのものでなくて、生きている人間がみんな持っているものです。そういう意味では、「文化」と「芸術」がくっついているのは少し変で、私はこの「文化芸術」という言葉を京都市の政策の中で使うことの意義は、京都の文化の中に芸術的な要素が、様々なところに存在しているというニュアンスだと思います。つまり生活の中に芸術的な輝きとかが普通に存在していることを指していて、それを基軸とするというイメージかと思っています。そう考えると、これは京都芸大生とか美術家だけの話ではなくて、文化目線で地域の人たちとか市民全員に関わってくることなのです。そう考えたときに、大学はプロの芸術家を育てることをミッションに運営している学校ですが、普通の市民が自分たちの文化芸術的な生活をよりよいものにしていくための仕組みって何だろうと考えると、例えば博物館、アートセンター、美術館、図書館などの存在だと思うのですが、それだけで足りているのかというところが分からないところです。

3点目は、京都市が東部エリアや東南部エリアに色々なものを誘致したり、盛り上げたりしていきたくて考えていますが、どんなものがあつたらよいと思うか学生に聞いてみると、色々やりたいことのアイデアを持っている人はいて、例えば、未経験な学生上がりみたいな人を誘導してくれるような大人につながる接点というか、ちょっとしたきっかけがあればよいとのことでした。具体的に言えば、例えば、自分の作品を世界で発表したいとき、どうしたらよいか分からない。そういう時に世界の市場で売っているギャラリストとか、色々なイベント企画を行うアートプロデューサーのような人と、どうしたらつながることができるかが分からない。そうすると、そういう場所がある程度整備されている東京とかに行かないといけないということになり、市外に流出していくということが起きます。そういうことを考えると、顔が見える人間が色々な情報をつなげていくような仕組みがあることが大事かと思っています。色々なコネクションとか人間関係を紹介できたりする場所、まさに人と人をつないでいくようなセンターがあればよいと思います。

◆門内委員長

ありがとうございます。特に最後の点は、私はこのエリアの将来像を考えたときに思い浮かんだ言葉があつて、ちょっと難しい用語だけでも大事だと思っているのは、「エコシステム」という言葉です。

例えば、たくさんのおいしい建築家は東京で育ちます。関西はあまり育ちません。その大きな理由は、東京には有名な先生やマスメディアなどが付き合ったり、集まる場が至るところにあつて、若い人はそこでチャンスがもらえますし、有名な設計者も若手をサポートしてくれます。そういうものが集積していると、人が育ちます。

そういう意味では、文化芸術のエコシステムのようなものが、この辺り一帯にあればよい

と思います。例えば空き家とか空き地とか色々なところに文化芸術のサテライトみたいなものがまちの中であって、先輩のアーティストやアーティスト・イン・レジデンスが一杯まちなかに溢れて、子どもたちもそこに入り出しているような、そんな仕組みが京都はあるようでないのです。特に、京都の芸術というのは、生活がそのまま洗練された形でアートになっているような、アートと生活が一体になっているところがありますので、その辺りが大事かと思います。

それから、全部計画しないで余地を残しておくことも大事です。実際に何かをやると次にこんなことをやったらよいという新しいビジョンが出てくるので、そういうものを組み込んでいけるような、ある意味でルースなシステムである方がよいと思います。

◆松永委員

私は全然違うことを考えていて、この辺に芸術大学とか色々なものが来て、世界の芸術がここに集まるということは何となく分かりました。

一方で、私は毎日のことしか気付きませんので、先ほど菱田委員から高齢者が5割を超えているまちであるということをお聞きして、その皆さんとは違うところで、将来の構想の話が出ているのだなと今初めて気付きました。

これまでも、そういうことがあちらこちらであって、たくさんの方が悩まれて、都市ができてきたということに、気付かせてもらいました。地域で生活しているものとは全然違うところで考えていただいている話だったのかなという印象も受けております。

◆門内委員長

コミュニティの豊かな暮らしと、文化芸術や京都芸大が来ることは別のことでなくて、つながっていると思います。

◆丹治委員

崇仁地区の住宅地区改良事業の地図（参考資料）を初めて見させてもらいましたが、我々商店街から見ても当然、京都駅が近くて優良な土地であることは分かりますが、将来像の中で、商業地帯的なお金を生むような土地にしていくのは、まだまだ先の話なのかなと思いました。

我々駅前の地域と崇仁地域がつながっていく方法を考えるときに、例えば高瀬川のイベントを広げてやるとか、東山区と下京区をつないでいる鴨川の七条大橋を大きくクローズアップして、そんなところからエリアをつないで、東山区と下京区と一緒にやるようなことからこの地域を盛り上げて、始めていく必要があると思います。

京都芸大が来て、この地域は大分変わるでしょうし、来ることで色々な店も生まれると思いますが、ここはお金をそんなに生まれないと思います。京都駅と東山区がつながっていくことをこの検討委員会で考えなければいけないと思います。

◆鎌田委員

一番大切なことは人が増えることです。皆山学区だけがマンションが建ってきたので人口は増えていますが、稚松、菊浜、崇仁などの学区は人口が減り、子どもも減ってきている。難しい問題ですが、人口が増えて初めて文化も広がると思います。京都芸大が来るのだから、多分そこに文化は生まれてきますし、若手芸術家の発表する場所などができてくるので、文化は自然に湧いてくると思います。

ただ、住みよいまちをつくるにはどうしたら良いかは、まちの我々が考えていけないと思います。人を増やしていくには、地域の代表する者が皆とコミュニケーションをよく取りながら、少しずつ住みよいまちを作っていこうという思いがないと、いくら京都芸大が来ても、人口は増えてこないと思います。

下京全体の人口は少し増えてきていますが、このエリアは減ってきているので、どうすれば人口が増えるのか、色々な事を色々な方々と話し合っていきたいと思っています。崇仁地域の京都芸大も大切ですが、周辺の人口、それから商店街の活性化も大事で、人口が増えないと儲からないですし、人口を増やすことを考えないといけないと思います。

◆菱田委員

この会の提言にすごく期待をしています。絵に描いた餅にならず、それを実現する提言にしたいと思っています。若い人たちや子育て世代に、このエリアに定住してもらうには、崇仁地区の市営住宅の空き家に入ってもらえばよいのですが、まだ事業が終わってないので、空いている市営住宅に他所の人を入れてはいけないということが法律で決まっているらしいのです。それを突破して、若い子育て世代にどんどん入ってもらうことが必要です。東京の方では、子育て世代に対する低家賃の優遇措置をやっている都市もあります。それを取り入れて、崇仁地区の市営住宅の空き家に、崇仁出身とかこだわりなく、若い人たちに来て、住んでいただく。そうなれば、商店街ももっと活性化するのではないのでしょうか。

久しぶりに七条通を歩いたら、結構閉まっている店舗が多かったです。一番多いのは飲み屋で、駅から帰るまでの時間に流動の人が遊んでるだけで、飲み屋はあまり住民とは関係のない商売です。住民と関係のある商売が成り立つようにするためには、やっぱり住民をもっと増やすことが大事で、空き住宅にどんどん人を入れるべきという提言をしていただきたい。

私達は崇仁のまちづくりを平成8年から始めています。ずっと色々な夢を持ってきましたが、結局できてきたのは市営住宅だけで、やっと市営住宅以外の京都芸大が来るということになりました。そのときに、皆から夢が出てきて、実は提言もしていますが、全部却下されています。

一つは、京都芸大だけが来ても、芸術のまちにはならないので、空き地に定期借地権付き店舗の公募してはどうでしょうか。できれば京都芸大の近くに伝統産業の工房を誘致して、低家賃で土地代も安くして来ていただいたらどうかということです。そうしたら、観光客が見に来るし、京都芸大に来たついでに、その周辺にある工房めぐりをしようとか、活性化に繋がっていくと思います。

それともう一つが、文化庁が来ることが決まったときに出た話です。東京に文化庁の管轄のフィルムセンターがありますが、もし東京に地震が来たら、日本の素晴らしい映画やフィ

ルムが全部没になってしまいますし、京都に第2フィルムセンターをつくるべきだと思います。それを崇仁に作ってはどうかという話が映画界の人からあったのですが、それも却下となってしまいました。

京都芸大が来るだけでは「文化芸術都市・京都」にはならないと思いますので、そういうことについての提言もこの検討委員会から出していただきたい。それを待ち望んでいる人もいます。具体的な提言をここから出せば、京都市も動くのではないかと思います。

◆鎌田委員

住民も声を上げて、国会議員でも動かすぐらいの結集をしないと、口だけで言っても動かないと駄目です。もっと皆で取り組んで若い人を呼びこまないと駄目ではないでしょうか。

◆門内委員長

京都芸大は移ってきますし、近くには京都美術工芸大学もあります。そこに住み始める学生たち、職員たちもいますから、定住人口を増やしていくことが大事です。

もう一つは文化芸術に関連するイベントなどで人も集まってきますが、このような関係人口と定住人口をバランスよくすることも大事です。関係人口だけ増えて、夜は誰もいなくなったら、これでは24時間都市にならないので、よいまちにはなりません。かといって住んでいるだけだと、閉じた都市になってしまいますから、住んでいる人と来られる方とのバランスが、これからのまちづくりでは大事になります。

◆高岡委員

学生は在学中そこに数年住みますが、就職とかですぐに外に出てしまい、あまり住民の頭数として期待ができないという話がありました。そうならないように、そのまま学生がそこに残れる制度があればよいと思います。特に美術系の大学が2つになるので、芸術系でやっていこうと決めた人がそのままこのエリアで就職できるように、例えば、そのまま工房に入れるような形になればよいと思います。また、工房が集まっていれば、観光客が工房めぐりをできるので、観光業としても盛んになると思います。

工房はすでにあると思いますが、中でどんなことをされているのかとか、作業工程を見たいと思っても、京都はお店自体がちょっと閉鎖的なところがあって入りにくい気がしますので、将来的にそういった工房をまとめて作るとなった場合、入りやすく、開けた工房になっていけば、観光面でもよいと思います。

◆門内委員長

デザイン系はまだよいですが、ピュアアートになると就職がなかなかありません。そういう人たちが、そういう工房なりで活動をして、生活していけるまちというのは、十分考えられます。

◆高岡委員

在学中にも大学の近くにそういうところがあれば、顔見知りになれてよいと思います。

◆門内委員長

私は大阪芸大に行っているのですが、うちの学生たち5人で富田林市に空き家を借りて、倉庫を使って5人で必要なものをそろえて、ファブラボを作って、卒業制作をそこでやっているのです。空き家のそんな使い方も考えられます。

◆植田委員

昨年4月に開学し、以来、地域の人は地域の人で、自分たちの今までの生活とか守りたいものがあるのも分かりましたし、大学は大学で新しいことをやってみたいということで、その辺で齟齬があったのかと思います。それで何回も京都市の人にも入ってもらって、やり取りをしているうちに、例えば、大学で地域の方々が運動会とか体育祭をするときは、大学の職員や学生も混じって一緒に運動したり、うちの大学の文化祭のときには地域の方々にも来てもらって、色々一緒にイベントを起こしたりしていくうちに、大分打ち解けてきたかと思っています。

「方策1」に、大学の地域連携という項目がありますが、大学としては、地域貢献は常に考えており、色々なことをやっています。例えば、貞教学区で、うちの建築の学生が地域の路地の調査や空き家の調査をやっています。こんなに空き家があるのかと改めて分かり、自治会の会長さんにも非常に感謝されたりしています。

それから、「なづなまちかどミュージアム」といいまして、11月17日から18日まで、民家の玄関先にアート作品を展示するというイベントが開催され、うちの学生も参加しています。

また、「文化財ナビゲーター」といいまして、これはJTBと連携しているのですが、修学旅行生をうちの学生が案内をするという取組もしています。12月に広島から来られる中学生の修学旅行生を対象に三十三間堂や養源院といったところを案内します。

また、高瀬川で「菊浜高瀬川せせらぎナイト」も行います。これは高瀬川沿いに灯りを灯そうということで、観光客の集客に一役を担うということでやっています。12m間隔で40基の灯籠を置くイベントです。

これらのことにより、だんだん点から線、線から面になりつつあるのではと思っています。

来年、京都国立博物館が主となって、9月の第1週にICOM（世界博物館会議）が開催されますが、そこにもうちの学生がボランティアで参加したり、うちの宿舎を提供したり、博物館とも連携して、色々なことをやっています。だんだん広がりつつあります。

◆赤星委員

私は御縁をいただいて、西陣地区の地域活性の委員も拝命していますが、そこでも、やはり「文化」という言葉が出ました。

見渡すと、今は文化庁が京都にやって来ることもあって、京都の中では「文化」という言葉が、ある意味で錦の御旗的な、「文化」という文言を取りあえず付けておけば良いような、

「文化」という言葉がちょっと一人歩きしているのではないかと感じています。

やはり、「文化芸術都市」という言葉は非常に座りもよいし、きれいですが、京都の他の「文化」を売りにしている様々な地域と、東部エリアをどう差別化していくのかというところで、もう少し歩踏み込んだ「文化」に関する定義をした方がよいのではないかと思っています。

昨今、世界の若者たちは、我々の世代や諸先輩方の世代と比べて、非常に多様性というものに対して寛容になってきていますし、若年人口が増え、活力を生み出すことに成功しているまちの特徴としては、アメリカを見ても、イギリスを見てもそうなのですが、ある意味政治の方向と違うところで、性別であったり、宗教観であったり、国籍であったりといった多様性を受け入れ、また、エコや環境に配慮することに対して寛容が高まっている国、地域かと思います。東部エリアの活性化の検討においても「文化」、「多様性」、「環境」のようなところは、もう少し明確に打ち出した方がよいと思っています。

また、観光客が増えると、地域の皆様との様々な課題が生じることもあります。文化や言葉、考え方も全く違う方々が来られるので、必ずギャップは出てきます。これはある意味仕方がない部分もあるかと思います。そういった部分では、地域の方々も定住人口を増やしていくことにおいては、ある程度寛容に新しく入ってくる方々と交流していかないといけないかと思いますが、そのための緩やかなシステムで結構だと思いますが、交流の場みたいなものをしっかり落とし込んでいくことが重要かと思います。

逆に新しく入ってくる方々も、その地域に対して一定の理解や尊敬といったものを持って来ることを、ある程度は、要求していくことも必要かと思います。今までの京都というまちが、あるいは東部エリアが、歴史的に皆様が何を、どういった価値観を大事にして生きてこられたのかを、しっかりと入ってくる方々にも押し付けではなくて、それを自然に守っていくようなマナーや共通理解のようなものがあると、対立みたいなものは起きないのかなと思います。それが最終的に地域の交流人口を集めるにしても、定住人口を増やすにしても地域のブランドにつながっていくかと思います。

そういったお互いがお互いを尊重するようなコンセプトといますか、「人と人、人と地域がつながるまち」と言う言葉は素晴らしいと思うのですが、この部分をもっとフィーチャーするのがよいのではないかと思っています。

◆門内委員長

この間、京都市の別の委員会で、SUUMO（スーモ）の編集長の話があったのですが、関西一円で最も住みやすい場所は西宮北口だそうです。それで足を運んで行ってきました。兵庫県立の文化芸術センターができて、すごく全体に文化の香りがするなと思ったのですが、何かが住みたくなるまちといますか、プラスアルファの魅力がありました。

去年もフランスのパリでプチホテルに泊ったら、狭いのにとっても高くて、おまけにシャワーをしようとしたら、寝室の方に水が流れていくのです。タオルで一生懸命土手を作ったのですが、ふと見上げたらガラスがあって、その周りに素晴らしい装飾が付いているのです。「そこにお金をかけるのか」と思ったのですが、水が流れても許しました。これがフランス

のエレガントかと思いました。

やはりその地域の住んでいる人の魅力というか、プライドが持てるもの、シビックプライドみたいなものだと思うのですが、大切にしているものがあるまちというのがすごく大事だと思います。そういうものが「文化」という言葉で言われているという気がします。

◆寺川委員

文化そのものが持っている可能性は、今ある地域資源を、どううまく価値化して、見える化して、それをどう生かすかという資源の活用もあれば、新しい文化を生み出すということもあると思います。

メッセージとしては、どう伝えるかということがあると思いますが、例えばそのまちに行くと「何々しやすい文化を持っているまち」というのも一つのメッセージとしてはあると感じました。

そのためにも、京都芸大が来てから、来る前という軸ではなく、今ある資源を再価値化して、見える化して、実感が伴うような活動が積み重ねられて、結果として京都芸大が来て、そこでまた新しいつながりが生まれたり、新しい文化が生まれたりという時間軸の中で、できることを実感できる仕組みが新しいビジョンの中に組み込まれていくことが必要だと感じました。

今の高齢化の問題もそうですが、今すぐ取り組まないといけないこともありますが、将来を見据えてやらないといけないこともあります。その間をデザインしていくことが大事ではないかと思いました。

それをどう具体化するかという、横串化するシステムが必要かと思います。地元の横串化もそうですし、行政の色々な部局をどううまくつなぎ合わせるかも大事です。この提言が絵に描いた餅にならないためには、地元も行政も横串通しをすることが重要かと思いました。

参考資料を見て非常に面白いと思ったのは、東部エリアの話をしているのですが、七条通で東山区とつながっていますし、西部エリアともつながっています。東南部エリアもリンクしていますし、京都駅南側の八条通も新しい土地ができます。かなり具体的に周りのエリアをつなぐ役割を持っている点もこの場所の特徴ではないかと思いました。

今、この時点を切り取ってということではなく、長い時間軸の中で今できること、将来というものを皆さんが実感できる、こういう時間のデザインがいるのではないかと思います。

◆門内委員長

新しい世界を作るにも、今の世界があるわけだから、そういう意味では、新しいまちづくりといっても、基本的にはまちを作り変えていくという話です。今の世界なしに更地に新しい世界を作る訳ではないので、今あるところから、どのように時間軸をデザインしていくのかということが、これからの計画の基本になります。昔はマスタープランで大きな絵を描いて、それを一気に実現していくという手法でしたが、そうではなくて、様々な主体がいて、その人たちの対話の中で未来を創っていく訳で、プランニングの仕方や方法論が多分変わってきていると思います。

本日欠席をされております長上委員と谷中委員の方から事前に事務局が意見を伺っている
そうですので、御意見の御紹介をいただければと思います。よろしく申し上げます。

◆事務局

いただいた御意見を御紹介させていただきます。

まず谷中委員からなのですが、谷中委員は自ら個人事業主をされていることもありまして、
「この京都駅東部エリアにおきましては、周辺にある個人事業主の方が、芸術系大学の在学
中の学生に対して創造活動の場を提供したり、あるいは作品制作を発注するとか、そういっ
たつながりを通じて、学生とのつながりやネットワークを在学中から構築していく。そうい
ったことで、この学生が大学を卒業してからも引き続いて、この周辺の個人事業主とも協力
して芸術活動等に従事しながら生活していくことができる。そういったまちをこのエリアで
つくってほしいなと思います」と御意見で言われておりました。

次に、長上委員からなのですが、「まちづくりは、そこに住んでおられて、まちの将来を考
える人がいないと、やっぱり続かない。それが一番大事である」ということで、「まちづくり
の活動があって、その活動に芸術系大学の機能の取組がつながっていくことが一番重要であ
るので、その意味では今回、コミュニティの方策を一番上に置いたことがよいと思う」と意
見をいただきました。

報告は以上でございます。

◆門内委員長

この場で意見としても出てきたものとかかなり響き合っていると思いました。

将来の余地を残すといった話であったり、時間軸の話であったりを見ると、取りあえず、
今代表して来ておられる本委員会の委員の方々の意見の中で、東部エリアの将来ビジョンを作
るのですが、実際にはそのビジョン自体が今後作り変えられていくといたしますか、進化をして
いくようなものにしていったらよいのではないのでしょうか。

関係者がまた増えてくると状況は変わってくる訳で、またここに参加していない方で、別
の意見を持っておられる方も当然おられます。そういう意味では将来ビジョンを作るときに、
ビジョンを今後も作っていく仕組みみたいなもの、作り変えていく仕組みみたいなものを構
想の中に組み込んでおいたらどうかと思います。つまりビジョン自体を進化させていく仕組
みを、この中に入れておいた方がよいのではないかと思います。そうすると、だんだん自
分ごとになっていく人が増えていくのではないかと思います。どこかで誰かが絵を描いたも
のに従っていくというのは、なかなかそうはいかないかと思しますので、自分の意見を入れ
てやっていくという意味では、マスタープランの作り方の中に、固定的な絵ではなくて、マ
スタープラン自身を進化させていくことができるような緩やかな仕組みみたいなものを組み
込むのがよいと感じました。

まちづくりの中で大学が果たす役割は相当大きなものがあると思います。特に若い世代が関
与して入ってくることは、すごく大きな影響があり、大きな力になると思いました。

◆赤星委員

東山も含めてですが、このエリアには文化芸術等に関わる文化財、寺や美術館や博物館などが非常にたくさん集積しているエリアの一つだと思います。

定住人口でなくて交流人口の話になりますが、今後観光客を含めた新たにこの地域に入ってくる方々に、もう少しこのエリアを回遊させるとか、あるいはまちづくりの中において、影響力をお持ちの神社仏閣を活用し、新しく入ってくる方々や地域の皆様を繋げることなどが非常に重要かと思います。

私が所管しています「M I C E」といわれている国際会議で申し上げますと、昨今こういった場所で、様々なイベントやミーティング、そういったものが非常にたくさん開催されております。

M I C E開催において多くの文化施設の活用は単なるイベントの開催だけでなく、地域の経済効果も創出しますし、地域の方の参加型のイベントなどの実施も可能になります。ぜひとも、このまちづくりのプランの中に本エリアにおける多くの文化財の活用振興の項目を入れていただきたいと思います。

◆門内委員長

このエリアを回遊させるという話が出てきましたが、回遊しようとする、道がちゃんとしてないといけませんし、モビリティの手段がないとなかなか動けない訳です。このエリアと隣接しているエリアとの関係も大事になるので、そういうところの道や移動の手段の整備も、すごく大事になると思います。

◆寺川委員

先ほど委員長が言われたように、これからの社会が変化していく時代の中で、時間をデザインして、変化を受け止めていく柔軟性を持った提言であると同時に、これは表裏だと思うのですが、具体的な実践を積み重ねていくというか、実感できる取組がないと、あまりにも変化をするということがビジョンのメインになってしまうと、今の問題が解決しないこともあります。

そういう意味ではハウジングであるとか、未活用地をどうしていくとか、「やってみよう」という、もう一歩踏み込んだところを積み重ねて変化させていくことが大事ではないかと思えます。

◆佐藤委員

京都市は様々な施設が、ある程度分散してきて、まち全体としてすごく住みやすいエリアになってきていると考えるのがよいと思っています。例えば、京都市が管轄している美術系の施設だけでも、芸術センターですとか、ロームシアター京都とか、京都市美術館があって、かなり内容の充実したプログラムを既に実践しています。そういうものが周囲にある中での東部エリアと考えると、すごく可能性があって、文化芸術という広い領域の中でどこをターゲットにするのが大事なことだと思います。

そういうものが既にあるところと京都駅東部エリアは、私は川でつながればよいと思っています。

ます。鴨川ですごく行きやすい道が岡崎方面につながっていると、高瀬川で四条、三条あたりまでずっと行けるとか、その辺は車が通れないようにするとか、自転車専用道路を作るとか、その辺をつないでぐるぐる回れる場所にするとか、いろんなつなげるやり方があると思います。

このエリアが何なのかなと考えたときに、これもまた非常に漠然としている言い方で恐縮なのですが、ここに行くと何かが創れる、わくわく感があるようなエリアであることがポイントだと思います。つまり、美術館とか劇場とか芸術センターとかは発表されたものを見る場所といますか、基本的に文化消費の場です。生産する場を考えたときに、このエリアがそうなのではないかと思いました。何かを作るということを、直接支援をしたり、こんなものを作ってほしいという人をサポートしたりするような、そういう性格を持ったエリアであることが、このエリアに求められることという気がします。

それでいうと、銅駝高校も来るのですが、学生は自分が作る技術を学習して研鑽するので、なかなかすぐにできないところがあると思いますし、大学の教職員も、やっていかなければいけません。そうなった時にやはり大学だけではできなくて、地元の人達とか、市とか、民間の活力とか、皆が協力して何かをするためにも、ここだと何かがつくれる感を醸し出したり、何かを作りたいとなった時に、ものすごくざっくり言うと、すごくサポーターなホームセンターみたいなものかと思います。茶碗を作ってくれたりとか、直してくれたりとか、地域全体がファブラボみたいな感じになるのがよいと思っています。

これをどう実現していくかについては未定なのですが、京都市民が自分の生活の中に何か足りないと思っているものをサポートするような、そのような文化芸術の生産地みたいなイメージを持っています。

◆門内委員長

今、皆さんのお話を伺っていて、とてもよいアイデアを思いつきました。

「方策1」のところで、コミュニティを「地域コミュニティ」と書いてあるのですが、そうではなくて京都芸大や、京都美術工芸大学や、あるいは外から来る人たちも含めて拡張されたコミュニティを作っていくというのがよいのではないのでしょうか。このエリアに関わっている地域住民や大学の人や色々な立場の人たちが一緒になって、新しいコミュニティを作るということです。そういう意味では、コミュニティを少し狭い意味で使い過ぎている気がします。3、4年住んでいる人も、長く住んでいる人も、1箇月滞在するアーティストも、皆がコミュニティの一員になれるような、そういう広い意味でのコミュニティを作っていくことが大事なことはないかと思いました。

それでは次の議題に移りたいと思います。

(3) 今後のスケジュールについて

【資料4につき、事務局から資料説明】一省略一

◆門内委員長

ただいま事務局から説明いただいたスケジュールに沿って進めていきたいと思っています。よろ

しくお願いします。

本日は発言できなかった意見や提案については、随時、事務局までメール等で御連絡いただければ、次回の検討委員会で紹介するなどして議論に活かしていきたいと思います。色々な意見を集約した形で、素案をまとめていただきたいと思います。

最後に、事務局から何かありますでしょうか。

◆事務局

本日は大変活発で、幅広い御意見をありがとうございました。次回、第3回委員会については12月の中下旬の開催を予定しています。その間に、具体的な推進項目についても原案にまとめ、次回にお示ししたいと考えております。

第3回の最終的な日程については、委員長とも相談をして、また皆様にお伝えします。

◆門内委員長

それでは、閉会とします。

(終了)